

# 井之口卓義氏発見の高山市国府町宮谷三休の滝一括出土銭

Introduction to Coins in Large Quantities Excavated at Miyadani in Kokufu-Town  
Takayama-City by Inokuchi Takayosi

長屋幸二・小野木学<sup>1</sup>

Koji NAGAYA, Manabu ONOGI<sup>1</sup>

<sup>1</sup>岐阜県文化伝承課

---

## 要旨

平成 18 年 5 月に井之口卓義氏より寄託を受けた高山市国府町宮谷地宮谷発見の一括出土銭について紹介する。1000 枚を超える渡来銭が確認されており、最も新しい銭が 1265 年初鑄の咸淳元寶であることから、13 世紀後半以降に埋められたものと考えられる。

---

## はじめに

当館が収蔵する考古資料は、個人による地表面採集品などが主であり、その多くは未報告である。こうした館蔵資料を研究活動の俎上に載せるため、順次観察、図化し、資料紹介を行っている。今回は、平成 18 年より寄託を受けている高山市国府町大字宮地字目細 1955-16 発見の一括出土銭について紹介する。

なお、今回の報告では、出土銭の観察・一覧表作成、拓本は小野木が行い<sup>(※1)</sup>、本文執筆及び一覧表修正は長屋が行った。

## 1 資料採集地について

今回紹介する資料は、平成 11 年 10 月、井之口卓義氏により発見された一括出土銭である。採集地は高山市国府町宮谷地、荒城川の支流のひとつである宮谷を、荒城川との合流地点から 3.5km ほど遡った上流にある三休の滝の脇、滝壺からおおよそ 30~40m 南の地点（北緯 36.24° 東経 137.27° 標高 796m）である。宮谷が荒城川に合流するのは国府盆地の東端で、地形の変化点にあたるこの周辺には、縄文時代中期を中心とする遺跡が広がっている（県史跡荒城神社遺跡）。合流地点には、大荒木之命（おおあらきのみこと）や、国之水国分神（くにのみくまりのみこと）、彌都波能売神（みづはのめのかみ）（「神社明細帳」）など水神を御祭神として祀る荒城神社がある。『日本三代実録』に「清和天皇貞観九年（867）10 月 5 日庚午、授飛驒国従五位下荒城神従五位上」とあり、神社の創建は少なくとも平安時代の前半まで遡る。また、神社名に郷名を冠することから、荒城郷の開発はこれ以前に行われていたことがうかがわれる。

また、荒城神社から直線距離で 8km ほど東北東の高山市丹生川町森部、4km ほど西の国府町木曾垣内、7km

ほど南南東の丹生川町町方の尾崎城跡でも一括出土銭が確認されており、県内でも一括出土銭が集中する地域のひとつである（小野木 2017）。

## 2 発見の経緯

平成 18 年 7 月、井之口氏に発見地を案内していただき、発見の経緯について話を伺うことができた。以下、聞き取りによって得られた情報をまとめた。

製材業・林業を営む井之口氏は平成 11 年 10 月 30 日、製材所の所員とともに、三休滝の南に隣接する所有地において、材木運び出しのための林道を造成していた。滝壺から 40~50m ほど南、地表下 50~60 cm あたりを掘削した際に重機のバケットの先に違和感を感じた。重機を降りて確認したところ、半畳ほどの範囲に大量の銭が散らばっていた。銭は一塊となっていたものを掘削により周辺に散乱させた状況であった。銭は、焼き物などの容器に入れられた形跡はなかった。重機で焼き物を割ったような感触はなく、周辺で焼き物の破片も見当たらなかった。また、紐は残存していないが、銭が棒状に連なって見つかるものもあり、紐の痕跡も認められたということから、縋の状態で埋納されたようである。この日は 505 枚について採集したが、日没により作業を中断した。

井之口氏は古銭発見について国府町教育委員会に報告するとともに今後の手続きについて助言を受け、それに基づき県教育委員会に埋蔵文化財の認定を受け（平成 12 年 1 月 31 日付 教文 38 号の 39）、古川警察署に拾得物届けを提出している。

雪解けを待ち、翌平成 12 年 5 月 14 日・15 日に古銭収集作業を再開した。この 2 回目の調査により 512 枚<sup>(※2)</sup>を採集した。この資料についても、同様の手続きを行っている（平成 12 年 6 月 19 日付 社文第 38 号の 5）。

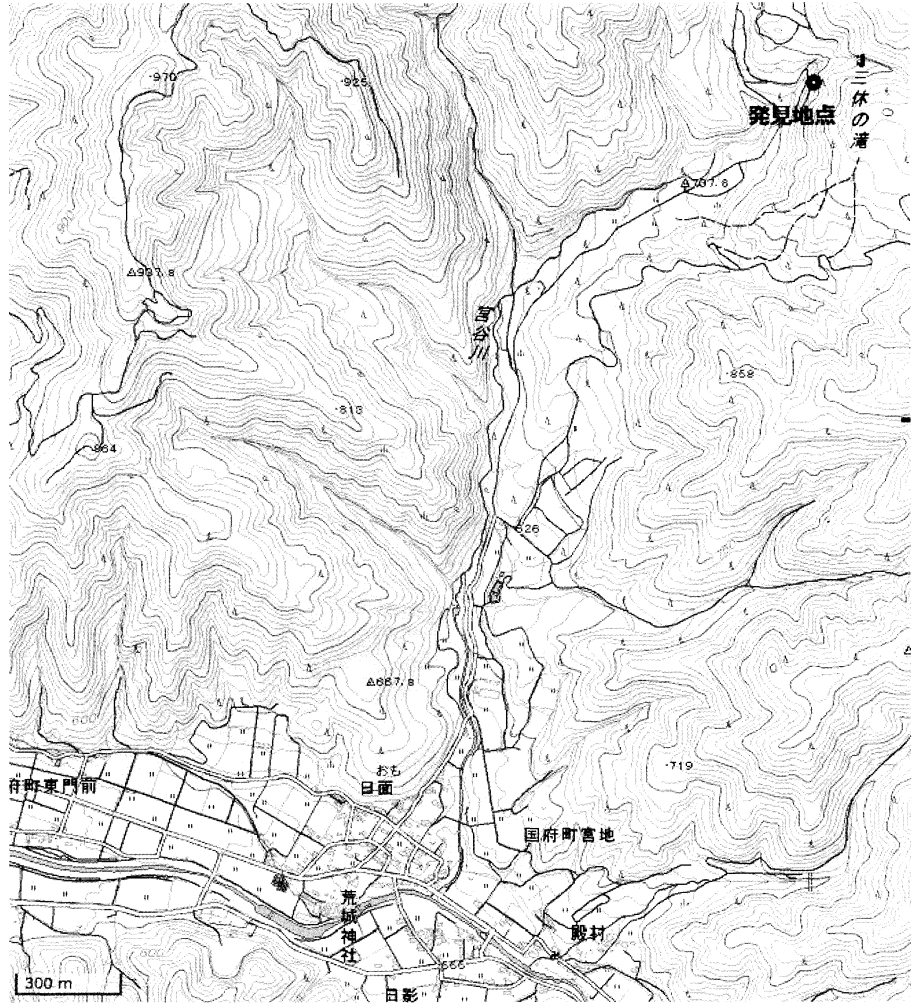
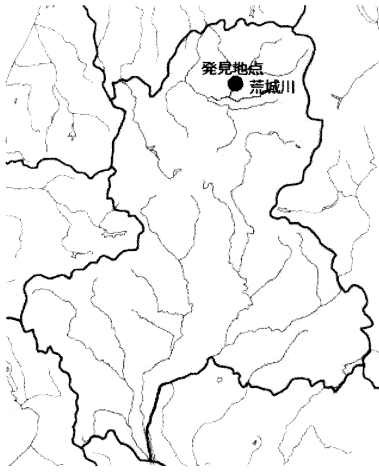


図1 高山市国府町宮谷三休の滝一括出土銭発見地点

(国土地理院1:25000地形図「町方」に加筆)

それ以降も、当地を訪れた際に数十枚程度採取している。

井之口氏によると、宮地には金鶏伝説が伝わるといふ。金の鶏が二羽埋められており、大晦日から元旦に鳴くというものである。伝説について確認しようとしたが、管見により確認することはできなかった。金鶏伝説が伝わる尾崎城でも一括出土銭が見つかることから、宮地の金鶏伝説が存在するのであれば、当地域では銭の埋納と金鶏伝説に関係がある可能性がある。

### 3 出土銭について

井之口氏は、採集した銭について、11年10月採集分を中心に500枚ほどを荒城神社に奉納し、12年5月以降の採集分を中心に543枚(破損銭などを含む)を県博物館に寄託された。

初鋳年が最も古いものは開元通寶(唐:621)、最も新しいものは咸淳元寶(南宋:1265)である。最も多いのは皇宋通寶(北宋:1038)で137枚(13.4%)、次いで元豊通寶(北宋:1078)122枚(11.9%)、元祐通寶101枚(9.9%)で、この3種で全体の35.2%を占める。これは、鈴木公雄氏がまとめた全国の出土銭の傾向に概ね沿うデータである(鈴木1999)。

また、洪武通寶(明:1368)や永楽通寶(明:1408)など明銭は含まれないことから、13世紀後半、鎌倉時代後期に埋納されたものと考えられる。県内でも古い時期の銭の埋納例である。

博物館に寄託された資料の一部は、人文展示室にて展示している。



図2 三休の滝

表1 宮谷三休の滝一括出土銭一覧

銭種	国名	初鑄年	枚数	寄託枚数	拓本
開元通寶	唐	621	78	42	1・2
乾元重寶	唐	758	7	6	3・4
開元通寶	唐	845	2	2	5・6
唐國通寶	南唐	959	1	1	7
宋通元寶	北宋	960	6	4	8・9
太平通寶	北宋	976	8	2	10・11
淳化元寶	北宋	990	10	3	12・13
至道元寶	北宋	995	20	10	14・15・16
咸平元寶	北宋	998	15	8	17・18
景德元寶	北宋	1004	20	10	19・20
祥符通寶	北宋	1009	20	6	21・22
祥符元寶	北宋	1009	15	11	23・24
天禧通寶	北宋	1017	22	11	25・26
天聖元寶	北宋	1023	40	14	27・28
明道元寶	北宋	1032	2	0	29
景祐元寶	北宋	1034	18	10	30・31
皇宋通寶	北宋	1038	137	79	32・33
至和元寶	北宋	1054	15	10	34・35
至和通寶	北宋	1054	5	4	36・37
嘉祐通寶	北宋	1056	13	7	38・39・40
嘉祐元寶	北宋	1056	25	11	41・42
治平元寶	北宋	1064	21	9	43・44
治平通寶	北宋	1064	2	1	45
熙寧元寶	北宋	1068	79	39	46・47・48・49
元豐通寶	北宋	1078	122	55	50・51・52
元祐通寶	北宋	1086	103	50	53・54・55
紹聖元寶	北宋	1094	42	21	56・57
元符通寶	北宋	1098	15	7	58・59
聖宋元寶	北宋	1101	39	18	60・61
大觀通寶	北宋	1107	20	15	62・63
政和通寶	北宋	1111	53	30	64・65
宣和通寶	北宋	1119	6	3	66・67
淳熙元寶	南宋	1174	8	6	68・69・70・71・72・73
紹熙元寶	南宋	1190	3	3	74・75
慶元通寶	南宋	1195	3	2	76・77・78
嘉泰通寶	南宋	1201	2	0	79・80
開禧通寶	南宋	1205	1	1	81
嘉定通寶	南宋	1208	3	2	82・83・84
紹定通寶	南宋	1228	2	1	85・86
淳祐元寶	南宋	1241	1	0	87・88
咸淳元寶	南宋	1265	2	0	89・90
判読不明			28	13	
計			1034	527	
破損銭			16	16	

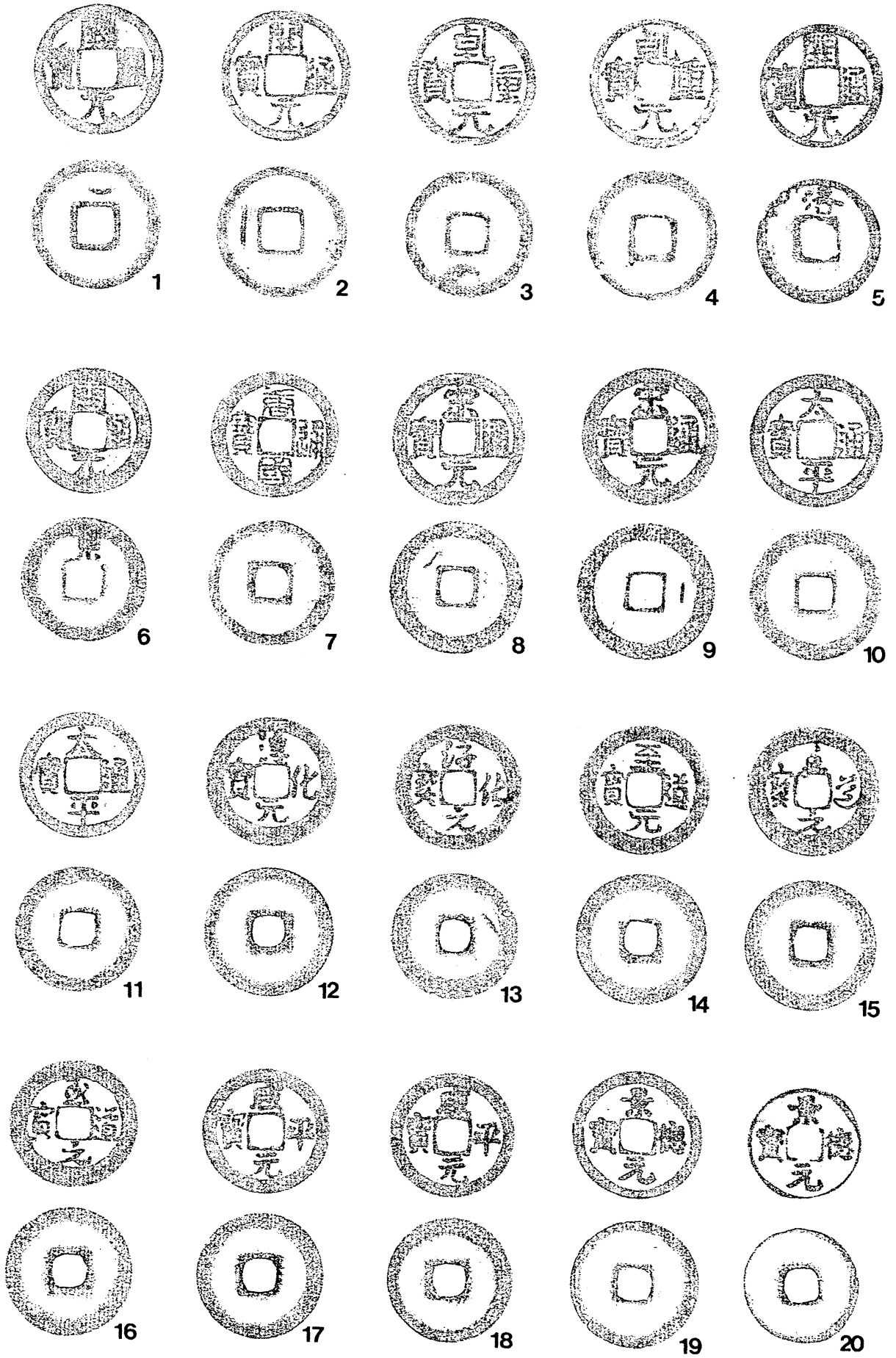


图 3 出土錢貨拓图 1

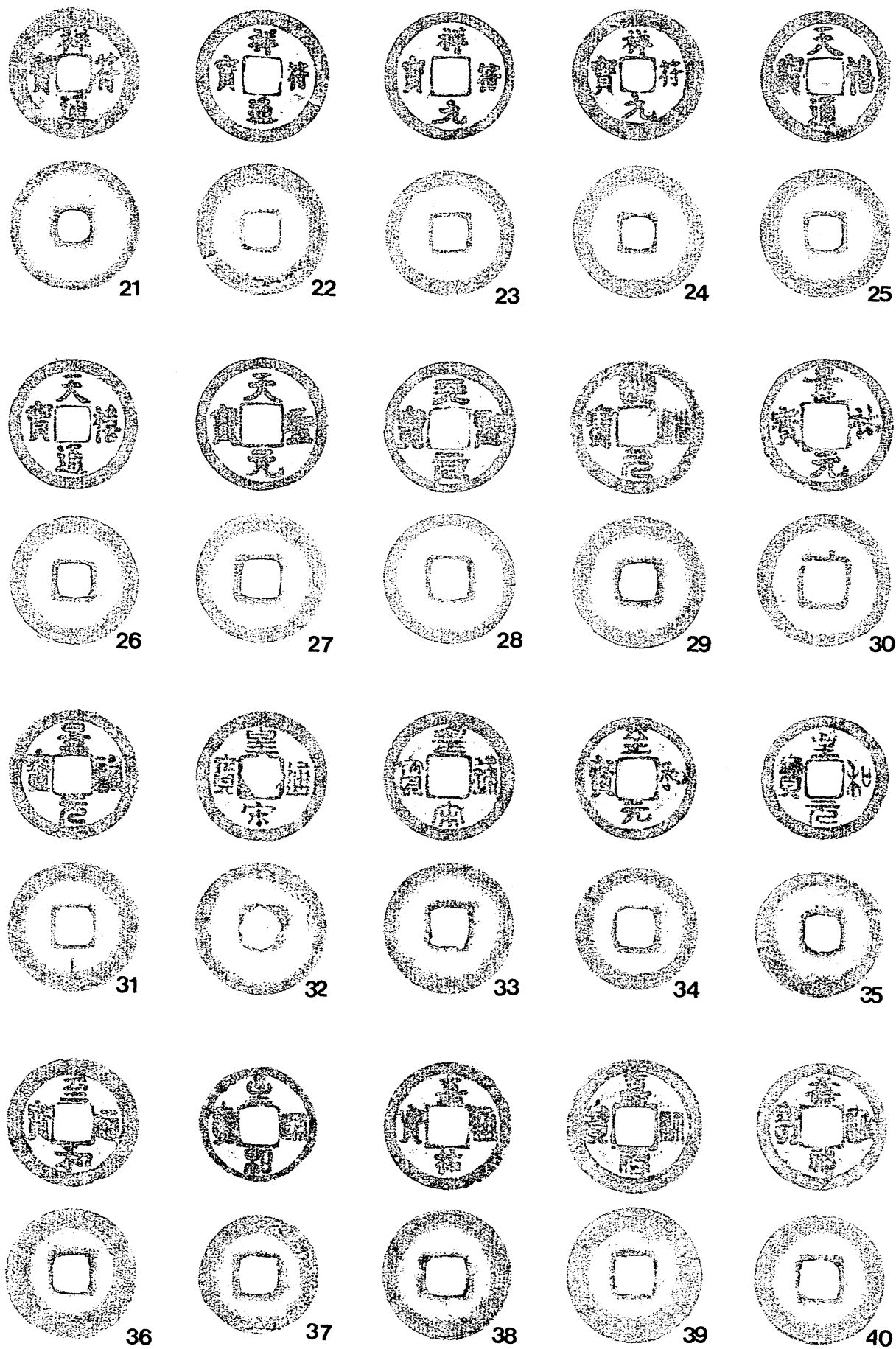


図4 出土銭貨拓図2



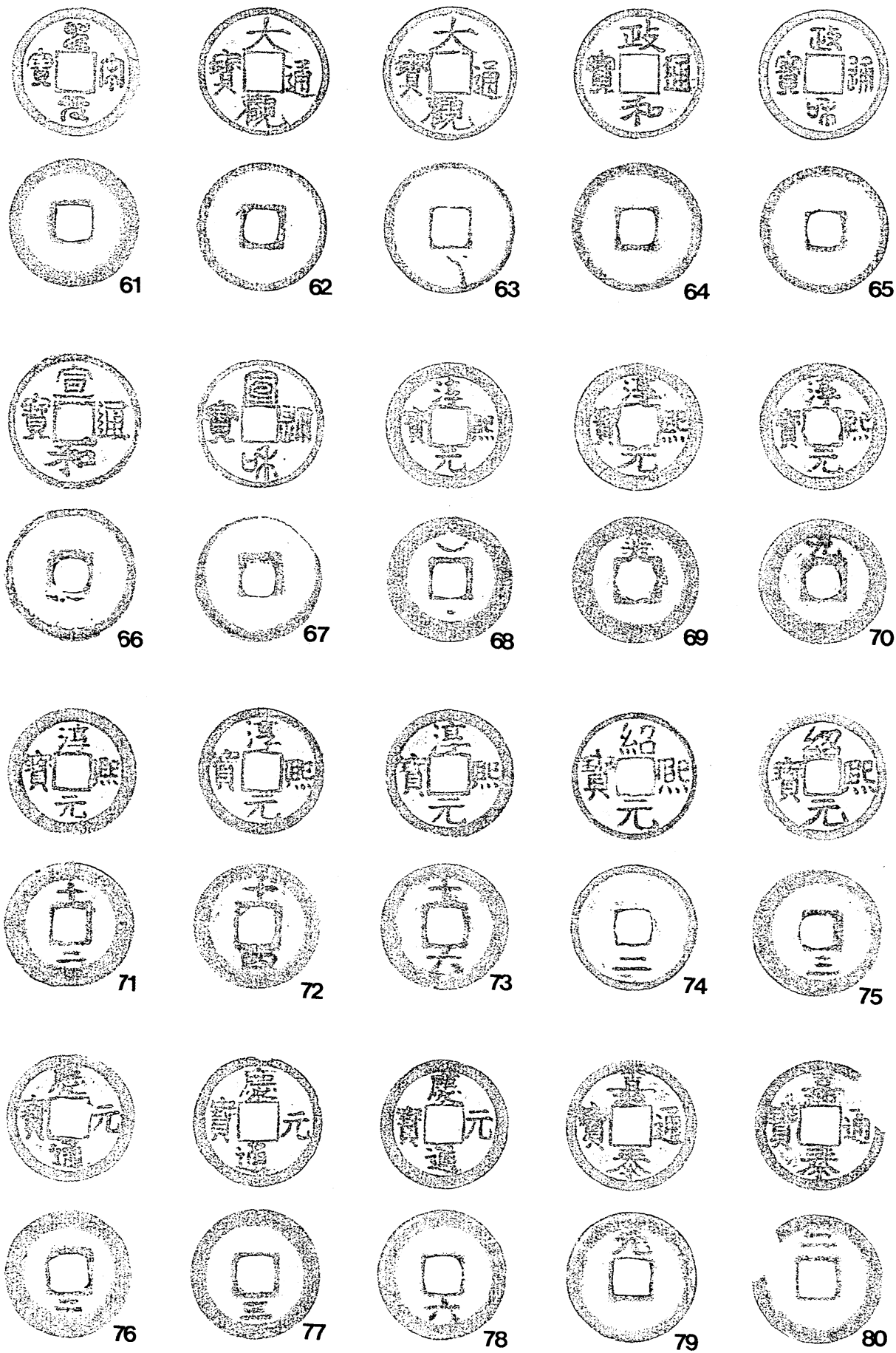


図6 出土銭貨拓図4



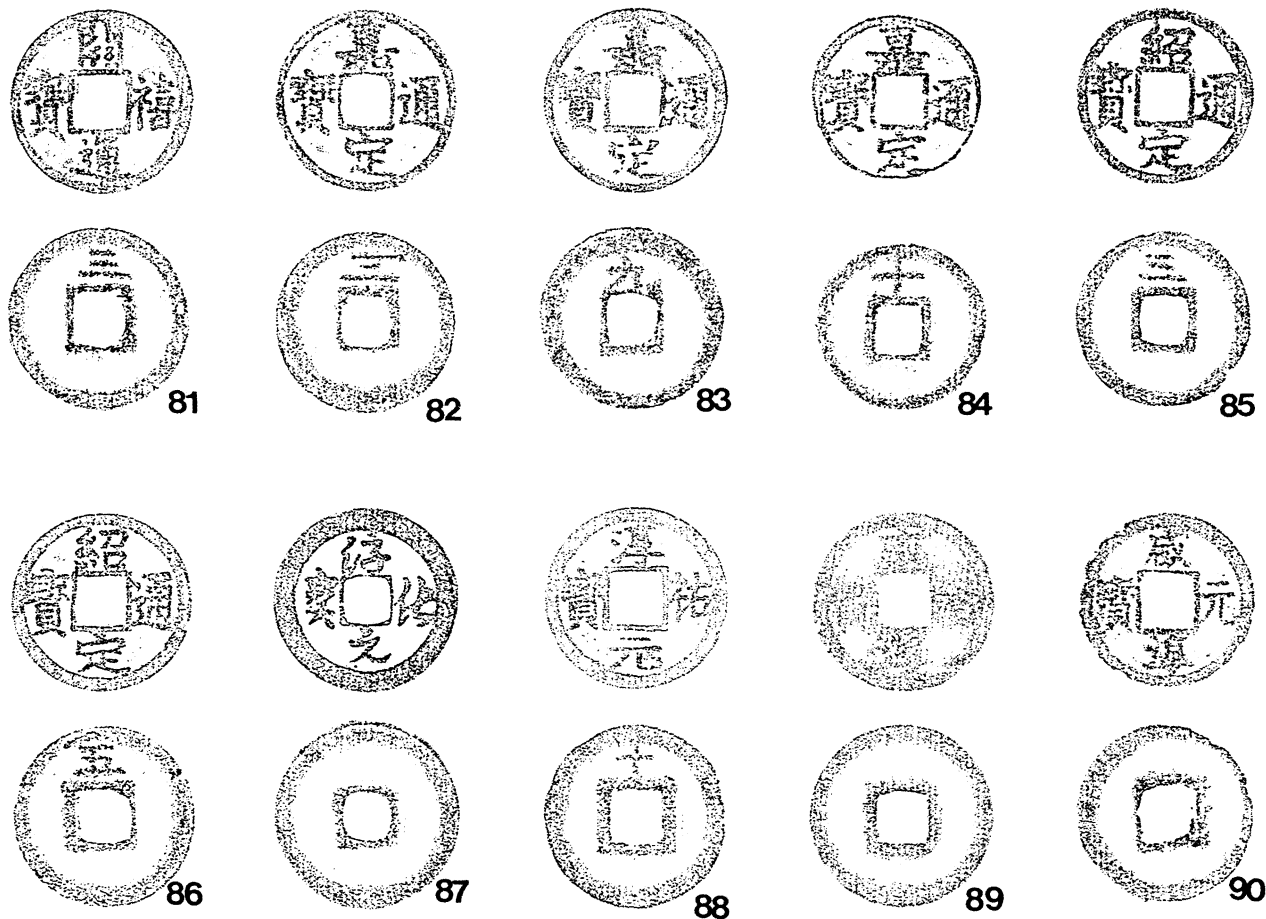


図7 出土銭貨拓図5

(註)

- ※1 出土銭の観察，一覧表作成，拓本は，平成12年度(2000)に実施された。
- ※2 井之口氏の報告(井之口 2000)では，2回目の調査で511枚採取したとあるが，県教育委員会の埋蔵文化財認定文書には512枚と記載されている。

【参考文献・引用文献】

井之口卓義. 2000. 「国府町宮谷出土の古銭について」『飛騨春秋』476号

小野木学. 2017. 「岐阜県の一括出土銭」『岐阜県文化財保護センター研究紀要』第3号

国府町史刊行委員会. 2011. 『国府町史 通史編1』

鈴木公雄. 1999. 『出土銭貨の研究』東京大学出版会

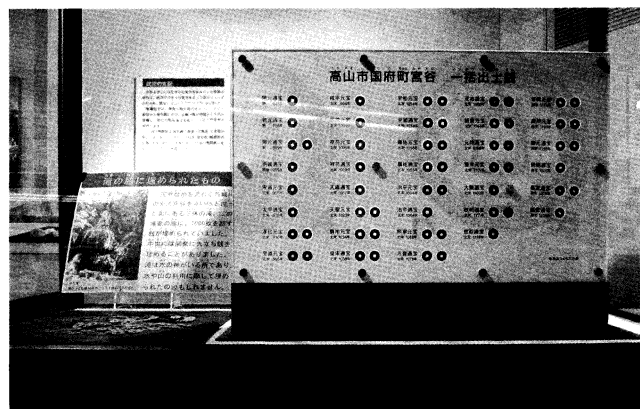


図8 展示風景(平成31年3月)